

詩

【小学1年生・2年生】

特選

きりん

若葉小学校1年

大志万 遥斗

きりんは

くびがながくていいな

ゆうやけもちかくでみれていいな

ひこうきもちかくでみれていいな

ほしもみえるかな

ひともちいさくみえるかな

きりんにつて

たかいところから

みてみたいな

(評) きりんにつてみたいというのは、楽しいゆめですね。きりんのせなかにのつて、きりんといっしょに歩いたら…と、ゆめがひろがりますね。「ほしもみえるかな」「ひともちいさくみえるかな」という表わし方がいいですね。

(彦根文芸協会

西村 和野)

準特選

ふうせん

若葉小学校1年

高橋

星

ふうせんふうせんとこまで

つづく

そらまで

つづく

うちゅうまでつづく

もつともつとつづく

せかいまで

つづく

ふうせんふうせん

もつともつと

つづく

やっぱりつづく

てんまでつづく

ふうせんふうせん

まつてまつて

ふうせん

どこまでつづく

ふうせんふうせん

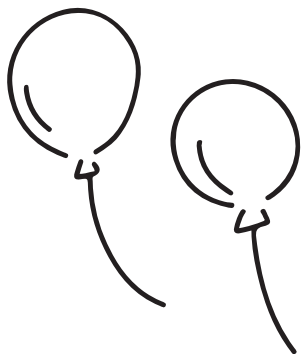
やっぱりつづく

もつともつとつづく

(評) ふうせんがとんでいくようですが、目にうかぶようです。どんどん上にあがつていくふうせんをおいにかけていく詩になつていて、すごいなと思います。「どこまでつづく」「やっぱりつづく」「もつともつとつづく」という表わし方が、どこまでも続いていくようでもとても上手です。

(彦根文芸協会

西村 和野)



準特選

おかあさん

若葉小学校1年

長谷川 愛菜

おかあさんいつもいつも
 あかちゃんのこと
 せいっぱいだなあ
 わたしなにも できないなあ
 そうだ おかあさんに
 ふれずとしよう
 おかあさんのやくにたちたいから
 あかちゃんのおせわをしよう

(評) いつもいそがしいおかあさん、赤ちゃんのおせわをするおかあさんを、いつもやさしい目でみています。おかあさんになにかしてあげたいという気持ち、あふれていますね。

(彦根文芸協会 西村 和野)

佳作

そらをとぶ

若葉小学校1年

寺本 朱璃

そらはひろいな
 みんなでそらをとんで
 ヤッホ きもちいい きもちいい
 にしも みえて きもちいい
 くもにのって
 ふかふか
 まちが ちいさくみえる
 うみも でんしゃも
 みえる
 そらもとつても
 きれい
 たかいな たかいな
 くものかたちも かわいく
 みえる
 かぜにふきとばされて
 いいきもち
 かぜにあつたつて
 いいきもち
 くもも
 げんきでいてほしいな

佳作

かなへび

若葉小学校1年

伊丹 悠人

あるひいつぴきのかなへび
 もうしにそうでした
 えさがなくてしにそうでした
 あるひ
 おとこのこが
 むしのくもをくれました
 でもでも
 まだまだまだまだ
 おなががすきました
 だからだから
 じぶんで
 さがしにいきました
 やつとおなががいっぱいになりました

入選

キッチン音

稲枝東小学校2年

大西 詩楽

キッチンのおとはいろいろある
すいどうのおとジャージャー
水きりのおとシャシャシャ
おなべぐつぐつ
ほうちようとんとんとん
ミキサーガーガー
テレビのおとをけしちゃうよ
うるさーい
まいにちながれてくるおとは
キッチンのおとではじまるよ

入選

ひこうき

若葉小学校1年

古山 創大

くものうえで
ひこうきがとんでいた
どこまでいくのかな
ぼくのしらない
まちをぬけた
がいこく
どこまでも
どこまでも
とんでいくのです



入選

いぬとねこ

若葉小学校1年

辻村 唯桜

いぬのころとねこのあん
あんはとってもあまえんぼう
ころはとってもとってもあまえんぼう
ころはききました
あんはなんでふゆはさむがりなの
うんねこはさむがりだからだよ
あんはころにききました
いぬだからかぜもひかないよ
あんはいいました
なんで
けがはえているからだよと
こたえました

【小学3年生・4年生】

特選

なないろのお花

城南小学校3年

小菅 紬生

なないろのお花
 どんなお花かな

「元気」のお花 黄色のお花
 オンシジウム フリージア ヒメミズキ

「未来」のお花 青色のお花
 ハナシノブ ブルースター ききょう

「ひみつ」のお花 むらさき色のお花
 ナス りんどう むらさきしきぶ

「しあわせ」のお花 だいたい色のお花
 ダリア ひまわり ツルウメモドキ

「ゆう気」のお花 赤色のお花
 インパチエンス グロリオサ うめ

「とくべつ」のお花 もも色のお花
 ストック もも さくら

「きぼう」のお花 緑色のお花
 キイチゴ ユーカリ りゅうぜつらん

明日も あさつても

中学生になつても

大人になつて お母さんになつても

おばあちゃんになつても

わたしがいなくなつても

地球がさい後の日まで

なないろのお花が

たくさん さきますように

（評）なんて楽しい作品なのでしょう。読み手が幸せな気持ちになれる程、色とりどりの花の名が出てきて、作者の豊かな感性と重なり伝わります。花好きな思いが上手にまとまり、華やかな作品となっています。

（彦根文芸協会 やまかみ まさよ）

準特選

ひこねりんご

平田小学校3年

佐野 碧哉

ぼくが しゅうかくした
 ひこねりんご

小さくてまるまるで

ちよつとだけ赤くてかわいい

ザクザク切つてジャムにしたら

あまくてポワン

食パンやヨーグルトにのせて

おいしくてポワワワ

まるごとボンとりんごすにしたら

スツキリ

たんさんわりして

すっぱあまくてシユワワワ

ぼくの仕事が一つふえた

りんごすのピンをゆつくり

まわすこと

おいしくなつてと毎日まわす
 ぼくのせいかでおいしさ百倍
 まぼろしのひこねりんご
 さいこう

(評) ジャムやりんご酢づくりを体験していく中で、「ひこねりんご」を愛する気持ちが、さらに詩作りへとつながりました。「あまくてポワン」「あまくてポワワ」の表現や「りんご酢のピンをゆっくりまわす」の言葉からも「ひこねりんご愛」が強く伝わってきます。さぞかし美味しくできたことでしょう。

(彦根文芸協会 やまかみ まさよ)



佳作

お手つだいしたよ

城南小学校3年

栗本

桜奈

お手つだいで
アイロンかけたよ
エプロンをかけたよ
しわをのばして
ピンとなったよ
家族にほめられて
心もピンとなったよ
うれしかったな

入選

きもちの天気はいつも反たい

河瀬小学校4年

大里

風幸

あそびにいきたいとき
プールにいきたいとき
はなびをしたいとき
いつもあめ
そとでじっけんしたいとき
やねになにかがひかっているとき
ひっこしをするとき
したいことをしたいとき
いつもあめ
あつくていえにいたいとき
いつもはれ
きもちの天気といまの天気いつもぎやく
でもたまあに思った天気になる
でもおきたらてんきはちがう
思ってたんきは いつもゆめが多い
一しゅうかんに一回は
思った天気になってほしいな

【小学5年生・6年生】

特選

うち返して

城西小学校5年

本田 彩葉

すがすがしい そのいつしゅん
バシッと ピンポンだまうち返して
でも ボール帰ってくる もどつてくる

すがすがしい そのしゅんかん
カコーンと ピンポンだまうち返して
でも ボール帰ってこない もどつてこない

すがすがしい このしあい
カコーンと うち返したピンポンだま
もう もどつてこない あせだくのボール

なぜって しあいはおわたたから
なぜって しんけんにしあいがんばったから

ラケットをおいて しあいしゅうりよう

(評)

体と意思のすべてで卓球に打ち込んでいる作者でなければ感じとれない、また生まれてこない言葉で表現できています。一瞬一瞬が一言の無駄や一文字の無駄もなく、強く爽やかに伝わって来ます。「あせだくのボール」とは作者の卓球にうち込む全てを表わす見事な言葉です。「しあいおわたたから」に思わず拍手を送りたくなります。

(彦根文芸協会 谷口 明美)



特選

しー

城北小学校6年

村田 涼世

「しー」
今赤ちゃんがねているよ

「しー」
今学生が集中しているよ

「しー」
今アリがみんな話しているよ

「しー」
今近所のおじさんが音楽を聞いているよ

「しー」
今しか聞こえない音がなっているよ

音 音 音

今まさにいろんな音が聞こえるよ
ねいきや

えんぴつの音
アリの話し声

この世界には
音がたくさんあふれているよ



(評) どれもが日頃はつい見逃している「赤ちゃんのねいき」「えんびつの音」、さらには小さな「アリの声」にまで、作者はじいっと耳をこらしています。「しー」という短い声に人や生き物への思いやりと応援する気持ちが込められていて、温かく伝わってくる詩に表現できています。作者の様子が目に見えるようです。

(彦根文芸協会 谷口 明美)

準特選

春はまだか

城東小学校5年

石川

椿彩

春はまだか
春はまだか
みんなみんな思っている
冬眠している熊さんやリスさん
冬眠はひまだひまだ早く春になつてと
みんなみんな思っている

春はまだか
春はまだか
みんな思っている
冬は寒いと思っている人達
冬は寒い寒い早く春になつてと
みんなみんな思っている
だが 春さんは
もう少しだから待つてね
と言うばかり

だけどみんなは静かに待つ
春はまだか
春はまだか
とずっとずっと思いながら

(評) 「春はまだか 春はまだか」という繰り返しで心地よいリズムとなつて、春を待ちこがれる「みんな」の気持ちを伝えて来ます。またどんな思いで待っているか、春さんの「待つてね」という願いも加わって、春の待ち遠しさを温かく強く表現できています。

(彦根文芸協会 谷口 明美)



準特選

アカトンボ

城東小学校5年

井上 侑里

アカトンボが飛べば
どんな空でも
赤くなる

次の日の朝
起きて空を見る

青くはれた空だけど
気づけば
トンボが飛んでいる

アカトンボが飛べば
赤が散る

(評) たいへん短い詩ですが「アカトンボ」と広い「空」のとり合わせに、いきなり心惹かれます。「どんな空でも赤くなる」という作者の思いには夢があります。「次の日の朝 空を見る」少年の姿やアカトンボを見つけた眼の輝きを想像します。「アカトンボが飛べば赤が散る」という言葉の表現はみごとです。

(彦根文芸協会 谷口 明美)

佳作

題名

城北小学校6年

小栗 快斗

わたしはなやんでいた
どんな詩をかくか
どんな題名にするか
おもしろくかくか しんけんにかくか

わたしはひらめいた
題名を「題名」にすることいい
いろんなメリットがある

まず 題名を考えなくていい
そのままだからだ

次になんでその題名にしたかを
かけばいいからだ
ねっ！
簡単でしょう

佳作

この糸はのびる

城東小学校5年

江口 果凜

この糸はのびる
心を結ぶために
この糸はね
働きものなのよ
いつも休まずしゆるしゆるる

あの糸はのびる
心を結ぶために
でもね

ときどきちぎれちゃうことがあるの
そしたらギョッと結ばいい

その糸はのびる
心を結ぶために
その糸の夢はね
一つ残らず心を結ぶこと
すてきな夢でしょ！
早く叶ってほしいな

佳作

家族

城北小学校6年

大谷 真広

今からはずかしいお話をします
 ぼくのオカンは
 とてもやさしい人です
 分からないことを教えてくれる
 ご飯を作ってくれる
 最強のオカンです
 もちろんみんなのお母さんもおこつたらこわいけど
 ぼくのオカンはちよつとちがいます
 小さいころから
 感謝をわすれたらダメと
 きつく言われてきました
 なので感謝をわすれないのです
 ぼくはけっきよく
 家族にたどりつくことがわかった
 これがぼくの家族の話でした

入選

秋の山

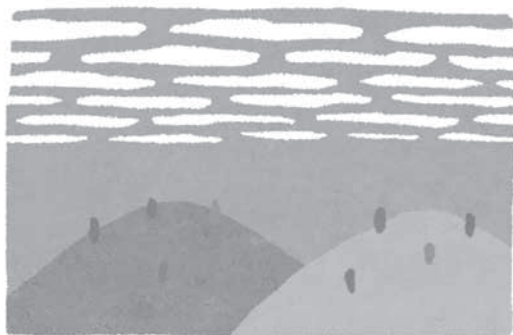
城東小学校5年

鈴木 陽成

山の朝
 チュンチュンチチチチ
 おしゃべり好きな小鳥です
 カワラヒラ モズ ジョウビタキ
 アカハラ マガン ハクセキレイ ツツドリ
 スズメ ツガミ
 みんなでおしゃべりたのしそう
 山の昼
 ひらひらくるくるカサカサカサ
 飛んでまいおるおち葉です
 アカシデ イヌブナ モミジ ケヤキ
 ウルシ カエデ ツツジ ヤナギ コナラ
 みんなでまうよ大サーカス
 山の夜
 コロコロリーリーリンリン
 みんなで歌う音楽隊です
 スズムシ マツムシ コオロギ ウマオイ
 クツワムシ キリギリス
 みんなで歌ってすごす夜

秋の山

鳥も落ち葉も虫たちも
 みんな山の宝物



入選

お兄ちゃん

城東小学校5年

高塚

璃桜

お兄ちゃんはいつもがんばっている
サッカーの試合でまけても
一言もいわずだまったまま…
私とはちがう

お兄ちゃんはいつもがんばっている
勉強・サッカーどんなことでも
私のお兄ちゃんをみないたい

お兄ちゃんはいつもがんばっている
お手伝いも
いそがしくても
家族のためならなんでもやってくれる
そんなお兄ちゃんが
大好きだ

入選

釣り

城北小学校6年

北村

佑樹

川についた
ぼくは川につくとすぐに竿を出す
「チャポン」

そのまま地面にすわる
なかなかつれないとあきてくる
でもその時

ウキがピクピク動き出す
急いで竿をあげる

すると 鮎が釣れた
ぼくはお父さんに

「釣れた 釣れた」と
自まんするように大きな声で言った

入選

私の大きな夢

城北小学校6年

北川

陽菜

「やったー!」

私の大きな夢はみんなで大声でこう言うこと
「がんばったね!」

私の大きな夢はみんないっしょにこう言うて
もらうこと

「おめでとう!」

私の大きな夢はみんなでこう言い合うこと

「またね!」

私の大きな夢はみんなにみんなに向けてこう
言うこと

「ひさしぶり!」

私の大きな夢はみんなでいっせいにこう言う
こと

私の大きな夢はみんながいなくてかなえられ
ない夢なんだ

【中学生】

特選

自分探し

南中学校1年

横田 歩栖

学校にいても

テレビを見ていても

いろんなことに頑張る人達の姿がある

輝く人はどうやってそれを見つけるのかな

自分のことなのに

なぜか自分でもわからない課題がある

きっとその人達は

かつこいいが向かなかつたら

次はかわいいを目指す

かわいいが向かなかつたら

次はかつこいいを目指す

挑戦して経験を積むのだろう

自分に似合う服を探すように

自分のなりたいものも探すのかも

(評)「頑張る」「輝く」「かつこいい」「かわいい」「挑戦」などの言葉「自分に似合う服を探すように・

自分のなりたいものを探すのかも」と書く作者はしっかりと批判する力を持っていて頼もしい。「自分でもわからない課題」を考えながら、本当の自分を探す旅を続けてほしいと思います。

(彦根文芸協会 尾崎 与里子)



準特選

日に焼けた私

南中学校2年

堀田 梨央

毎日じりじり

焼ける肌

服をぬぐと

白い水着をずっと着てるみたい

服を着ると

全身黒い

手のひらを見ると

白い

冬になつてもまだ黒い

日焼けしてない人と並ぶと

影みたい

ずっと黒いままなのかな

私の肌は

大人になつたら

もうちょつと白くなりたいな

(評) 日焼けした自分の肌を、短く活き活きした楽しい表現で詩にしています。四・四・三・三(四)、この形式をソネットと呼びます。短い詩なのに、読んでいるといろいろな深い世界の広がりを感じられたりします。それにしても白い肌が美しいなんて誰がきめたのでしょうか。

(彦根文芸協会 尾崎 与里子)

佳作

飛行機雲

河瀬中学校2年

丹治 燈里

もあもあもくもくふわふわ
飛行機雲はのびていく
くもをつきぬけまっすぐと

もあもあもくもくふわふわ
最後に残った雲の線
風にふかれてどこかに行った

もあもあもくもくふわふわ



【総評】

(小学生の部)

今年も、詩作品の応募数は他部門（ことに俳句・川柳）に比べるとかなり少数でした。

しかし、寄せられた作品はどれも日頃の暮らしの中の心に残った体験や自分の夢や想像などが、生き生きとした言葉・すなおな文でつづられていて、読む人の心にひびいてくる良い詩でした。

だれもが自分だけの体験や様々な夢や願いを持っています。さらに、それを言葉に表現する力も持っています。文に表わす機会が少なくなつたこの頃ですが、書くことは周りや自分をよく見ること・よく考えることにつながり、さらにはよりよく成長することにもつながります。短い文に自分の発見や思いを書きとめる時間を作ってください。文に書き表わす機会をぜひ設けてやってください。

(彦根文芸協会 谷口 明美)

(中学生の部)

中学生になると、急に自分と周囲を比べ始めます。これは大人になるための大切な課程ですが、落ち込む原因にもなります。小学生の時のように単純に生きられなくなり、与えられているたくさんのは見えなくなり、自分に無いものを追い求めるようになります。そんなふうに心が苦しむ時に、なぜか詩が生まれます。悩んだり苦しい時に、そのことをそのまま言葉にしてみましよう。言葉にすると何故か心が軽くなり前へ進めます。詩の不思議な力です。

(彦根文芸協会 尾崎 与理子)

